

白夜の季節のジューンブライドたち

成田からモスクワへ。モスクワからサンクトペテルブルクへの夕方9時過ぎのフライト機中から見る空は、地平線に太陽が残り周囲は金色に染まっていた。着陸し車で空港を出たのは午後11時。ホテルに着いたのは12時過ぎだった。でも、外はまだ薄明るかった。

「白夜」である。サンクトペテルブルクは北緯59度にある。北半球の日照時間が最も長くなる夏至（6月22日）を前に、緯度の高い地域ではどこでもこうした現象が起きている。

昨年6月、デンマークのコペンハーゲンを訪れた際にも同様だった。こちらも北緯55度とほぼ同じような高緯度にあるからだった。

サンクトペテルブルク訪問は、ドストエフスキーの『罪と罰』の舞台の取材が主目的だったが、ここを訪れたらエルミタージュ美術館を観光から外すことはできない。世界三大美術館の一つとして絶対的な評価を誇っているからである。

美術館は宿泊のホテルから徒歩10分の至近距離にあった。ネヴァ川に沿うように長く燦然と荘厳に伸びていた。白夜のシーズンには外国からの観光客が集中し、ホテルの値段は上がりその確保さえ難しくなる。

そんな状況下、午後3時に美術館に着くと、入場チケット売り場には100人余りが並んでいた。我々のような外国からの個人旅行者のほか、先生に引率されたロシアの子どもたちや各国からの観光団がその国の言語でガイドから説明を受けていた。

入場料は一人400ルーブル(約1200円)。それに撮影料として200ルーブル(約600円)。フラッシュは許されていないが、日本の美術書や学校の教科書に出ているような作品を自分のカメラで撮影できるのはありがたい。館内は大変な数の見学者だが、廊下や展示室の天井が高くゆったりとした造りのおかげでそんなに混雑は感じない。

芸術的な才もなく、美術の知識にも乏しい筆者がコメントするのは気が引けるが、素人の一旅行者としての目からすれば、展示作品そのものでは、フランスのルーブル美術館、スペインのプラド美術館の方が、日本ではよく知られた作品が多いような気がする。エカテリーナ2世の“隠れ家”とも言われた宮殿の部屋の天井の高さや、天井が金で塗られ、金色をふんだんに使った展示室の華麗さと建物自体の壮観さが人気の秘密ではないかと思った。

6月16日夕方、サンクトペテルブルクからモスクワへ再び空の旅で戻った。

実はもう43年前のことだが、27歳でNHK学園高校の教師だった夏休みに、私は当時のソ連を訪問した。JTBの「ソ連ハイライト旅行」との企画で、一行はビジネスマン、OL、新婚カップル、学生等のちょうど10人。ロシア語のできるガイドが案内して2週間の旅だった。

忙しい今から考えれば、時間的にはぜいたくな船旅だった。横浜港を出港し東北の太平洋沿岸を北上、津軽海峡を通過し日本海を横断してナホトカへ。1日半のゆったりした船旅。ナホトカからは鉄道でハバロフスクまで北上。ここから飛行機でイルクーツクへ。ホテル宿泊の朝、

バイカル湖を訪れた。湖畔の水は冷たく、どこまでも広がる青い湖、清々しい冷気が気持ちよかった。

イルクーツクから再び飛行機でモスクワへ。宿泊は「ウクライナホテル」。なんとモスクワ大学の建物にそっくりの建築だった。物資が不足していた当時のソ連。ホテルのフロア当番の婦人から、私が着替え用に持っていったワイシャツを売ってくれと懇願され、さらには女性用のストッキングを持っていないかと所望されたのには驚いた。

サンクトペテルブルクへは、「赤い矢」との意味の「レッドアロー号」の寝台特急列車だった。今回は定年後だというのに、残念ながらそんな時間的ゆとりはなかった。両都市の往復ともに1時間半の空の旅となったのである。

さて、今回のモスクワ訪問の主目的は、トルストイの『戦争と平和』の舞台めぐりだった。モスクワから南に約200キロのヤースナヤ・ポリャーナまで足を伸ばし、さらに空き時間はモスクワ大学の見学やクレムリン周辺の散策にもあてた。

モスクワ大学から続いている台地の雀が丘のほぼ真下にはクルーズの乗船場があった。私たちも1時間半のモスクワ川遊覧を楽しんだ。100人ほどが乗った船は、途中で何艘ものクルーズ船と行き交った。土曜日の午後5時。初夏の太陽が降り注ぐ甲板は紫外線も強い。屋根のある2階の船べりに席をとると、私は移りゆく川岸の光景にレンズを向け忙しくシャッターを押した。

川面から見るクレムリンの城壁は、なぜか権威の象徴のイメージは伝わってこなかった。船上では拡声器から歌が流れ、各テーブルではビールや食事をとる友人や家族連れで盛り上がっている。見たところ、我々のような外国人観光客は少ないようだ。

「娯楽の少ないロシアでは、食べたり飲んだりしながらのこうした船の観光は結構人気が高いんです」。モスクワに滞在する友人の言葉だった。

ここでは戦争とは全く縁のない、のんびりとした平和な空気が流れていた。歴史の中では、『戦争と平和』に描かれているように、数え切れない数の若者たちが戦場に命を散らした。「平和」であることがいかに素晴らしいものか、あらためて感慨を深くしたのだった。私も旅を支えてくれた関係者や周囲への感謝と充実感にほんのりと酔っていた。モスクワ川クルーズはロシアの旅を締めくくるのにふさわしいひとときとなったのだった。

そして最後にもう一つ。

文学紀行の旅は思いがけず楽しいシーンも用意してくれていた。訪れる先々で何組もの新婚カップルに遭遇したことである。若者たちの幸せそうな旅立ちを見ていると、こちらも楽しく幸せになってくる。

サンクトペテルブルク、モスクワ、それにトルストイの家博物館のあるモスクワから200キロのヤースナポリャーナで……。出会った数は20組を超えた。

花婿はほとんどが黒い背広か礼服だった。でも結婚式での主役はなんといっても花嫁である。

スラリとした白い肌に美しい金髪。白いベールと白いロングドレスは、新緑の周囲の木々に映えて、輝くばかりに美しかった。

教会で式を挙げてきたばかりのカップルが、近くの公園や橋またはモスクワ大学の前庭などで、記念写真やビデオ撮影をしていた。自分たちの新スタートのために、思い出の地やゆかりの美しい場所を選んでいるのだろう。

そんなグループを見つけると、私もカメラを手に急いで駆けつけ、後ろから“撮影班”の一員に加わった。おめでたい場である。“アジアから来た見知らぬおじさんだから”とあって拒絶されることもないだろう。それどころか、同行の通訳にお祝いのお言葉を教えてもらおうと、私も大声で祝福の言葉を贈った。

「シャ スリーバ！」（お幸せに！）

そんな呼びかけに、なかにはニコッと微笑みを返してくれる花嫁もいた。

カップルを囲む若い仲間たちから声上がる。

「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」

もともとはロシア語で「苦(に)が(い)」という意味だそう。そこから展開して「苦いからもっと甘くせよ！」、つまり「もっと甘いところを見せてくれ！」との囃し立てらしい。

そんな声がかかると、カップルはひしと抱き合い熱くながーいキスを何回も繰り返した。それを“撮影班”が入念にカメラに収める。私もその後列に加わったのだった。

日本は梅雨の季節だが、寒くて長い冬が明け新緑が広がる6月は、ロシアでは一年で最も美しく過ごし易い時。「June Bride」(ジューン・ブライド)の慣習は特にはないとのことだが、そんな短い夏の間を最大限に生かしての“結婚式ラッシュ”なのかもしれない。

「ロシア文学紀行」という少しばかりお堅いテーマの旅は、思わぬ甘い場面との出会いの連続で、心温まる楽しい旅ともなったのだった。